近代科学・機械技術における神秘主義的方向転換の可能性

―ベルクソンの科学・機械技術論―

加　藤　千　佳

序

誕生以来「科学」は、世界を物質的に豊かにしてきた。特に近代以降、飛躍的に進歩した「自然科学」と、それに由来する「機械技術」は、野にあれば凍える極寒の日にも我々の命を守り、実りなき地域に食物を行き渡らせ、山の頂上に新鮮な水を用意する。そのように科学や機械技術は、「自然」が我々の生を阻害しようとするとき、いつも我々を支えてくれた。だからこそ我々は、それらが更に発展することがそのまま、我々の生の補完や、生活の安楽化に繋がるというイメージを必然的に所持することになる。しかし同時に、それが真なるイメージなのか、という問いはいつも付きまとってきた。

まさに近代の思想家であり、科学・機械技術の飛躍的な発展を間近に見たベルクソン（1859-1941）は、晩年の大著『道徳と宗教の二源泉（Les deux sources de la morale et de la religion）』（1932）を、以下のような文章で締めている。

> 人類は、自ら為しとげた進歩の重荷の下で、半ば圧しつぶされて、呻吟している。人類は自分の未来が自分次第だということを充分に知ってはいない。人類は、まず第一に、自分は生き続けようと欲しているかどうかを考えてみなければならぬ。次に、人類が自ら問うべき

ことは、自分は、ただ生きていくことしか欲していないのか、それともそのほかに、神々を作るための機械である宇宙の本質的機能が、反抗的な我々の地球の上においてでさえ、十分に遂行されるのに必要な努力を提供しようと欲しているかどうか、ということである。（二源泉、390頁）

この記述には、現今の人類に対する危機の警告がなされていると共に、それでも人類の行く末は人類自ら決めなければならない、という確信が見られる。つまり人類は「自ら為しとげた進歩」に対する責任として、自らが進むべき道について自ら問い、選択しならないのである。

では、その選択の正しい方向性としてベルクソンが示したものは何か、というと、それは「神秘主義」に外ならない。もう少し切り込んで言うなら、その「神秘主義」とは「キリスト教神秘主義」のことであり、ベルクソンは、人々が科学・機械技術と不可避的にかかわり、「神」への疑惑が一般に広まり始めていた時代[1)]において、「キリスト教」が維持してきた「神秘家」の特権的な魂、そして彼らが保持する「神秘的飛躍」に目を向け、それこそが人類を救うものであるというのである。

ベルクソンは、哲学者として著名でありながらも、自然科学への造詣が深いことでも知られている。昭和期の哲学研究者である淡野安太郎（1902-1967）は、ベルクソンの思索の特徴を以下のように語る。

しかしベルグソンの著作のどの一つとして、実証的な科学研究の成果によりどころを求めることなしに書かれたものがあるであろうか。ベルグソン自身の書いたものを丹念に読むならば、誰しもベルグソンにおいて科学と哲学とがむしろ一つにとけ合って、その思索の原動力となっていることを感ぜずにはおれないだろう。（ベルグソン、11頁）

淡野が示すように、ベルクソンの著作からは、科学に対する豊かな知見と関心が見て取れる。実際ベルクソンは、脳、身体、意識、記憶、進化といった、主に自然科学が扱う領域の研究に勤しんでいる。しかし、そのベ

ルクソンが、科学・機械技術と不可避的にかかわる時代を迎えた人類に対し、「神秘主義」への回帰を促しているのである。

もちろん、ベルクソンの思索に対しては、反知性主義的性格が認められることもあるのだが、それでもベルクソンが、科学への深い知見と関心を持っていたことは紛れもない事実である。また逆に言えば、そのような「神秘主義」や「直観」への志向性が、科学の営みと相容れないと見なされた可能性もある。いずれにせよ、科学の営みと積極的にかかわりつつ、「神秘主義」や「直観」を重視して展開されたベルクソンの、「科学」と「機械技術」に対する思索の軌跡を辿ることは、未だそれらとの友好な関係を模索し続けている、現今の人類にとっても価値のあることだろう。

本稿ではそのような、「科学」と「機械技術」の特性と問題、そしてそれを人類が乗り越えるために要請される「神秘主義」への回帰を、ベルクソンが如何なる問題意識のもとに、如何なる経路によって描き出したのか、また、「神秘主義」への回帰の結果として如何なる未来を望むのか、その２つの問いを軸に展開していきたい。

第一章　知性と科学

1-1　工作する人

ベルクソンは、『創造的進化（L'evolution créatrice）』（1907）の中で、人間を「工作する人（Homo faber）」（創造的進化、179頁）と定義する。そして、人間固有の「知性」[2)]について、「人工物、とりわけ道具を作るための道具を製作し、そしてその製作を無際限に変化させる能力である」（同上）と述べる。同時に、人間以外の動物については、「道具」を所有しているものの、その道具が「それを使用する身体の一部になっている」（同上）という。動物のそれは「ひとりでに製作され、修繕され、自然のすべての作品と同じく、細部の無限な複雑さと機能の驚くべき単純さを示すが、求められた時に、何の困難もなく、たいてい感嘆すべき完璧さで、要請されていることを即座に行う」（創造的進化、181頁）、有機的で完全

で不変の「道具」である。一方、人間の「道具」、つまり知性によって製作された道具は、「どんな形をとることもできるし、どんな用途にも役立ち、新たに生じるどんな困難からも生物を助け出し、無制限の力を与える」（同上）かわりに、努力なしでは獲得できない、不完全で可変的で使い勝手が悪いものである。

また、この人間の「道具」と、人間以外の動物の「道具」の対比は、「知性」と「本能」の対比につながる。ベルクソンは、「完成された本能は、有機的な道具を使用し、その構築まで行う能力である。完成された知性は無機的な道具を製作し用いる能力である」（創造的進化、180頁）と語る。つまり「本能」が、身体の「器官」という「有機的な道具」をほぼ自動的に作り上げてそれを使用する一方、「知性」は、自分の外側にある「物体」を道具化するのである。

> もし我々の諸器官が自然的道具と言えるならば、我々のさまざまな道具は人工的器官だといえよう。労働者の工具は彼の腕の延長である。それ故、人類の用具はその身体の延長である。（二源泉、379頁）

引用の通り、ベルクソンは諸々の道具を「身体の延長」として捉える。それはつまり、身体の内部に位置するようなものとして、自分の身体とは無縁の「物体」に手を加え使用する、ということである。これを踏まえれば、「物体を道具化する」ということは、「身体を延長させる」ということと同義であろう。しかし、何故知性はそのようなことが出来るのだろうか。知性のどのような働きがそれを可能にさせるのか。近現代フランス思想の研究を行う檜垣立哉は、『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』（2022）において、ベルクソンが想定する知性の働きについて、以下のように述べる。

> 本能は、動植物的なものであれ動物的なものであれ、自らに与えられる生命の器官とそれに結びついた自然の道具＝器官とをただ生きるのみであるだろう。しかし知性は、自らにあたえられる自然から、そ

こに存する働きの関係性を抽象化し、それを自らの行為に織り込むように扱うことができるのである。（ベルクソンの哲学、216-217頁）

つまり知性は、有機物の働きから、その働きの「形式」を取り出して、その形式を無機物に転用することで、その無機物を有機物のように動かすことが出来るのである。そしてそれによって人間の身体のように無機的な道具が働くようになるのであり、人間身体は従来の器官を超えた働きをする人工器官によって、身体と、身体の「行動性」を拡張してゆく。

またベルクソンは、『創造的進化（L' Évolution créatrice）』（1907）においても、道具と人間存在の関係について語っている。

とりわけ、この道具はこれを製作した存在の本性に逆に影響を及ぼすのである。なぜなら、この道具は自然の有機物を延長した人工的な器官で、その存在に新しい機能を行使するように促しながら、いわば、より豊かな有機的組織化を与えるからだ。この道具は欲求を満たすたびに、新たな欲求を作り出す。（創造的進化、181頁）

上記で語られていることを踏まえれば、「知性」によって製作された道具によって、人間の身体とその行動性は留まることなく拡張してゆくことになる。しかし、「知性」がそのような拡張、つまり「技術」というものの使用において、本質的に有機体を無機的に扱うということは、有機体が有機体であること、つまり「生きている」ということが必ず無視される、ということである。それについてベルクソンはさらに、以下のように語る。

製作は原物質に対してのみ働く。これは、製作が有機的な素材を用いるときでさえ、それらを不活性な対象として扱い、それらを形成した生命に気を止めない、という意味である。〔中略〕したがってもし知性が製作を目指すのであれば、知性は、実在における流動的なもの[3)]を部分的に取り逃がし、生物におけるまさしく生命的なものを完全に取り逃がすことになる、と予想することができる。自然の手から生まれたわれわれの知性の主要な対象は、無機質な固体である。（創

造的進化、197p）

つまり「知性」は、「無機的なもの」だけを取り扱うので、有機体そのものを、それがそうあるままで道具化して使用することはできない。そのため、知性の行為は一見創造的に見えるけれども、その内実は「必要な場合に、対象そのものの代わりに、そのような仕方で物事が進められることになる近似的な等価物を用いる」（同上）だけであって、知性はどうあっても、「生命の本質的な側面を取り逃がす」（創造的進化、211頁）よう宿命づけられているのである。

そして、そうした「知性」の実際的な問題は、「近代科学」の勃興において顕在化する。知性の作品である近代科学は、有機体を無機的に扱うという知性の特性を肯定的に用いることで発展を遂げてきた。次節では、ベルクソンにおいて語られる近代科学の性質を確認し、ベルクソンが近代科学に込めた期待と懸念の両方を検討したい。

1-2　科学の問題

ベルクソンは科学について、常に「瞬間」を切り取るものであるという。それはつまり、時間を数直線上に表せるものとして、「量」的に捉える、ということである。しかし、古代の科学が切り取る瞬間が、「最終目的地や絶頂点」（創造的進化、418頁）という、歴史の中で突出した瞬間であったのに対して、近代科学は「対象を任意の瞬間において考察する」（創造的進化、417頁）。言い換えれば、古代の科学が、全体において本質的と言える「瞬間」を切り取ろうとするのに対して、近代科学は「任意の瞬間を無差別に対象にする」（創造的進化、425頁）のであり、そこには全体性という視点が欠けているのである。そのように、ベルクソンが考える近代科学は、有機体の生命の先や、諸々の関係性について考慮することができない。

また、ベルクソンは、近代科学を「天文学の娘」（創造的進化、423頁）と呼び、「所与の瞬間における惑星それぞれの位置を知ったとき、別の任

意の瞬間におけるそれらの位置を計算する」（同上）という天文学の問題が、あらゆる物質のシステムに転用されたと語る。つまり、所与の瞬間における要素の位置を、数学的に分析することで、任意の瞬間における要素の位置を決定できる、という確信が、あらゆる「自然についてわれわれが立てる問題と、それらを解くために用いる方法の根柢にある」（創造的進化、424頁）のである。しかしながら、結局のところその問題が正確に立てられるのは、無機物化した事物のみであり、たとえ分析が成功しても、我々が「物質の真の要素各々の位置を知ることは決してない」（同上）。そのため、実際に切り取った任意の瞬間の要素の位置を分析して、他の任意の瞬間の要素の位置を決定したり、そこから全体の時間を再構築したりする、ということは不可能なのである。

しかし、現今の近代科学は、時間を空間化することで処理しているし、たとえ生命の本質に辿り着けないとしても、差し当たり上記のことが可能であるという前提に立って進歩してきた。そうした近代科学を偏重することは、やはり生命の本質から必要以上に遠ざかることを意味すると言わざるを得ず、近代科学の偏重、もしくは近代科学への安住ということが、好ましくない事態であることは言うまでもない。

しかしここで、その「好ましくない事態」が、実際我々にどのようにかかわるのか、という問題が導出される。もっと言えば「科学」が、「生命そのもの」を捉えられないということの害は、どのように我々に迫ってくるのだろうか。そうした問いに対する答えとして、「機械技術」の問題を次節で取り上げたい。

第二章　機械技術

人間は、近代科学が花開く以前にも機械を発明し続けてきた。しかし、近代科学以前の「機械」は、「現勢的な、いわば可見的なエネルギーを、すなわち筋肉的努力や風力やあるいは水力の落下を利用するだけに止まった」（二源泉、374頁）ので、その効果も限られたものであった。しか

しながら近代以降、もっと言えば蒸気機関の発明の日以来、「幾百万年の間も蓄積されてきた潜勢的エネルギーが、単に分離されるだけで、利用され得るようになった」（同上）のであり、「機械技術」という飛躍的な進歩が、我々に訪れてしまったのである。

ここで、前章で記述した知性の働きについて今一度確認したい。ベルクソンにおいて語られる「知性」とは、「無機的な道具を製作し用いる能力」であった。そしてそこで作られ用いられる「無機的な道具」とは身体の延長であり、いわば人工の身体器官である。人間はそのように、漸進的に身体を拡張し、それに伴って行動性を広げてきた。しかし、そのような着実な進歩に対して、「機械技術」がもたらした進歩はあまりに急激であった。ベルクソンは、機械技術の勃興と人間身体について以下のように語っている。

> 石油や石炭や水力電気で動き、幾百万年もの間蓄積された潜在的エネルギーを運動に変える機械は、我々の有機体に、人類の構造計画においては確かに何ひとつ予想されていなかったほどの非常に広大な外延と、その大きさ及びその力にひどく不釣り合いな恐るべき能力を与えるに至った。（二源泉、379頁）

機械技術もまた人間における「器官」の役割を、その本質において果たしているのであるが、機械技術という人工器官は、外部から潤沢なエネルギーを吸収してあまりに自在に動く故に、人間がこれまで扱ってきた諸々の道具とは比べ物にならないほど強力であるし、その働きが及ぼす範囲も非常に大きいので、結果的に人間身体をとてつもなく巨大にしてしまったのである。ベルクソンは、こうした近代的機械技術という新たな器官の勃興について、「またとない幸運だったし、地球上の人間の最大の物質的成功だった」（二源泉、379-380頁）と語っているが、同時に、以下のような問題を提起する。

> 魂は、途方もなく大きくなったこの肉体のなかで、相変わらずもと

のままでいるので、今やこの肉体を充たすにはあまりに小さすぎ、この肉体を導くにはあまりに弱すぎる。そこから、この両者の間に空隙が生ずる。また、そこから、この空隙の定義の数と同じくらいに多数の、恐るべき社会的、政治的、国際的諸問題が生れて来る。（二源泉、380頁）

つまりベルクソンは、機械技術によってかつてない拡大を果たした身体に対し、「魂」が拡大せぬままいるせいで、身体と魂の間に空隙が生じていると主張するのである。そして、その空隙が諸々の問題を生み出しているために、人間は必然的にその「空隙」とかかわることになる。しかし、ここでベルクソンが言う「魂」とはどのようなものだろうか。次章で確認していきたい。

第三章　魂と宗教

3-1　小さな魂

『二源泉』においては、「魂」そのものへの説明というより、例えば「開いた魂」、「閉じた魂」という「状態」や、「魂の執着」、「（魂が）感ずる」というような「行為」についての言及が多く見られる。しかし、魂が「状態」を持ったり「行為」をしたりすることが可能である、「主体」的存在として描かれていることは確かである。また、前節の記述からも分かるように「身体」とはやはり異なるものであるのであるので、「人」そのものではなく、「身体」と切り離されてあるところの「人格性」や「精神」のようなものが「魂」という言葉で表現されていることが見て取れる。

また、ベルクソンは「魂」について、『精神のエネルギー（L’ energie spirituelle）』（1919）収録の「魂と身体」という講演記録の中で以下のように語っている。

この身体のほかに、空間においては身体よりもはるかに遠く拡がり、時間を通して持続する何かをわれわれは把握します。それは身体に対

> して、もはや自動的でも予見されたものでもない運動、予見不可能で自由な運動を求めるか押し付ける何かです。あらゆるところで身体を超え、それ自体を新たに創造しつつ行為を創造する何かが《自我》であり、《魂》であり、精神です。（精神のエネルギー、43頁）

以上を総括すれば、「自我」とも「精神」とも言表可能な、身体に自由な運動を要求する何か創造的なものを、ベルクソンは「魂」と呼んでいることが分かる。つまり「魂」とは、本質的に無機的な「もの」である身体を、生命として動かすものである。重要なことは、この講演記録において、「魂」が身体を超えている、と語られているにもかかわらず、上記で確認した機械技術に関する箇所では、身体と魂の間に「空隙」というものが生じている、と記述される点だろう。拡大したのは身体であり、魂でないことは明白であるため、「空隙」の存在は、本来創造的であるはずの魂が、それ自体の働きを果たせなくなっている、ということを指していると言える。つまり、機械技術によって巨大になった身体に対し、魂が元のままで小さい故に、身体を上手く導くことが出来ないのである。それこそが、「空隙」がもたらす危機である。

これは、「機械技術」の副作用ともいえる害であるが、先述したようにベルクソンにとって、科学の発展や機械技術の勃興は紛れもない進化の産物であるし、その上、常なる変化を本質とする我々が、それ以前の段階に後戻りすることは出来ない。では、身体と魂の「空隙」を埋めるためにはどうすればよいのだろうか。ベルクソンは、以下のように述べる。

> この空隙を塞ぐためには、潜在的エネルギーの、しかし今度は道徳的な潜在的エネルギーの新たな貯蔵が必要だろう。それ故、我々は、上述したように、神秘学は機械学を呼び出すというだけにとどめないで、拡大した肉体は魂がもっと拡大することを期待しており、機械学はなんらかの神秘学を必要とするだろう、と付言しよう。（二源泉、380p）

石炭や石油といった「潜在的エネルギー」は、人間身体を飛躍的に拡大させた。そうであるなら、新たな貯蔵を期待されている「道徳的な潜在的エネルギー」とは、人間の魂を拡大させるものである。つまりベルクソンは、機械技術によって飛躍的に拡大した人間身体を充分に制御できるほどの巨大な魂を求めるのである。しかし、どのようにしてそれを貯蔵すればよいのだろうか。そこで持ち出されるのが、「神秘学 Mystiqe」[4]である。

> 恐らくこうした機械学の起源は、一般に信じられる以上に、神秘的である。この機械学[5]が自己の真の方向を再び見出し、その能力相応の貢献をするのは、この機械学によって地面に向かってますます低く腰をかがめさせられた人類が、その手を借りて、再び起き上がり、天を仰ぐようになる場合だけである。（二源泉、380頁）

引用にあるように、ベルクソンはそもそも、機械の出現は、神秘学によって要請されたと考えている。というのも神秘学が擁する「神秘主義 Mysticisme」は、「腹がへっても食えないという恐怖につきまとわれている人間」（二源泉、379頁）には広まり得ないので、神秘主義は自身を普及させる足がかりとして、全ての人々の「物質生活の保証、尊厳の保全」（二源泉、378頁）を行わせるべく機械技術を呼び出したのである。しかし機械技術は、全ての人々に物質的満足を与えるのではなく、「若干の人々のための贅沢と過度の安楽」（二源泉、379頁）を目的としてしまった。そしてその結果、人間は「地面に向かってますます低く腰をかがめさせられた」のであるが、その人間が再び起き上がって天を仰ぐためには、その機械技術が、全人類の物質生活の保証と尊厳の保全に役立つような方へ向き直らなければならないし、人間は、「神秘学」、「神秘主義」の手を借りなければならないのである。

しかし、「神秘主義」は、具体的にどのように我々に手をかしてくれるのだろうか。そもそもベルクソンの言う、「神秘主義」とはどのようなものなのだろうか。次節ではその、ベルクソンが希望をかけるところの「神秘主義」の姿を探るために、主に、それとは似て非なる「神秘主義」につ

いて検討し、両者の違いを明らかにしていきたい。

3-2　創話機能と静的宗教

ベルクソンは、「完全な神秘主義とは偉大なキリスト教神秘家たちの神秘主義である」（二源泉、277頁）と述べる。また、仏教や古代ギリシャの神秘主義が、神との合一に対する恍惚や観想に止まっていたのに対し、「キリスト教神秘主義」は、その恍惚の先に「不安」を持っていると語っている。そしてその「不安」とは、思惟と感情を神と合一させたとしても、「意志」が外部に残っていて、本当はそれをも「神」に帰さねばならないという「予見」があることに由来するという。そのように恍惚の先、つまり神との全く完璧な合一を望むこと、そこに「キリスト教神秘主義」が完全である所以がある。しかし、当の「不安」の増大によって、神秘家は恍惚から抜けざるを得ない[6)]。

ベルクソンは、神秘的な魂は、「神が利用し得るほど充分に純粋でも堅固でも柔軟でもないものは、すべて自分の実体から除去する」（二源泉、283頁）と言い、「並はずれの力業のために製作された恐ろしく頑丈な鋼鉄の機械」（二源泉、282頁）の例を挙げて、厳しいそぎ落としの末に「すばらしい道具の待望へ解消するに至る」（二源泉、283頁）と語っている。つまり、「見神」によって神の存在を確信し、その後「不安」に落ち込むことで「そぎ落とし」を完了して、神との完全なる合一、つまり神の「すばらしい道具」としての自身を手に入れるのである。従って、「キリスト教神秘主義」を特権的立場に据えるのは、「キリスト教神秘家」の「不安」であると言える。では、その「不安」はどこから来るのだろうか。

ベルクソンは、「不安」について以下のように語る。

> しかし、知性自身は底の方まで見つめていた。なぜならば、知性的存在はもはやただ現在にだけ生きていたわけではないからである。反省のあるところには予見があり、予見のあるところには不安があり、不安のあるところには必ず生命への執着の瞬間的な弛緩がある。（二

源泉、256頁）

つまりベルクソンは、「知性」がその「不安」の源である、というのである。しかし「反省」ということが、関係を抽象化して主客に分ける働きを基にして起こることを考慮するならば、「知性」の働きが「不安」を呼び起こすということは正当な主張であるだろう。そしてそれを踏まえれば、「知性」の働きが活発にある、ということが、「キリスト教神秘主義」には不可欠であるということになる。しかし、それならば「キリスト教」以外の宗教には「知性」がない、とベルクソンは考えるのだろうか。否、決してそのようなことはない。むしろベルクソンは、人間が普遍的に知性を持つことを認めているのであるが、それ故に、反知性的機能が、原始的な諸宗教、つまり「キリスト教」と対置される「静的宗教」の中に見いだされるという。

具体的に「静的宗教」がどのようなものかと言うと、祖先崇拝やアニミズム的多神崇拝、動物崇拝などを軸とする、「創話機能 fonction fabulatrice（想話機能）」を持つ宗教のことである。この「創話機能」こそが、先述の「反知性的機能」に他ならないのであるが、これについては、フランス文学・哲学の研究者である平賀祐貴が、著書『アンリ・ベルクソンの神秘主義』（2022）において詳述している。平賀によれば、「社会」が、知性によって乗り越えられない「個人的自主性」「死の確信」「偶発事」という障害に直面したとき、生命の力が「創話機能」として噴出するという[7)]。「創話機能」とはいわば本能の残滓であり、知性に対抗し得る力を持つ。そして、この「創話機能」が如何に働くのかというと、社会から離脱しようとした人間に「物語」を突き付けるのである。その「物語」とはすなわち、「もし仮に社会から逃亡しようと試みるならば、その行為は「都市の守護神」によって罰せられるだろう、という物語」（アンリ・ベルクソンの神秘主義、159頁）のことである。つまり端的に言えば「創話機能」とは、「社会」に対する防衛機能なのである。

ベルクソンにおいて「社会」は、それぞれの要素が組み合わさって全体

を動かすという点で、きわめて自然な組織体である。ベルクソンは、「生命的なものの根底には社会的なものがある」（二源泉、145頁）と語り、身体との類似どころか、あらゆる身体の根底に位置するものとして「社会」を描き出す。しかしながら、その内で全く完結している生命のシステムと、人間社会はやはり異なっている。

> とりわけ、人類のあるところには必ず社会がある、そして、社会は昆虫では自動機械的に完全な自己忘却にまで押し進められているそれにも似た一種の、無私無欲を個人に要求する。こうした無私無欲を支えるためには、反省を当てにしてはならない。知性は、抜け目のない功利主義的哲学者の知性でない限り、むしろ利己主義を勧告するだろう。（同上）

上記の引用のように、知性は、我々人間が、身体器官のような「無私無欲」をもって社会とかかわることを許さないのである。しかしまた、ベルクソンにおいて描き出される「社会」は「自然から欲せられた円環」（二源泉、242頁）であり、人間が生命を維持していく上での自然的、合理的なシステムであるので、知性が「社会」の存在を脅かすということは、「生命」をも脅かしているということになる。すなわち「知性」は、その本性として反生命的なのである。しかしながら、「発生するひとつの種は、その種の生存を可能にするものをあらゆる細部にわたってすべて持っている」（二源泉、256頁）ので、「知性」という反生命的機能とのバランスを保つために、人間を社会に、生命に引き戻す「創話機能」が備わっているのである。つまり、「創話機能」を本質とする「静的宗教」という原始的な宗教形態は、現状最後の「創造的飛躍」の結果である人間が、自分のことしか考えないという状況に陥ることなく、人間生命を「維持」し続けることを使命とするのである。

しかし、その「維持」を続けていくことは、人間が滅びの時を迎えるまで永遠に変わらない、ということでもある。もちろん、人間がそれでよいのなら構わない、というメッセージは、序で引用した『二源泉』の最後の

箇所に現れているのであるが、実際我々は現今の社会において「呻吟」しており、ベルクソンの著作をめくって打開策を探す十分な理由を持っている。では、結局ベルクソンが呈示する答えとは何だろうか。それは、我々がその場に留まらずに、変化すること、進化することである。「静的宗教」ではなく「動的宗教」へ、「キリスト教」へ、という動きがベルクソンに見られるのは、まさにその「変化」や「進化」への志向性に由来している。

ベルクソンは、『創造的進化』の中で、「意識的な存在にとって、存在するとは変化することであり、変化するとは成熟することであり、成熟するとは無際限に自分を創造することであるのが分かっている。」（創造的進化、25頁）と語り、生物の本質がそのような、変化であり成熟であり創造であることを示している。すなわち、「静的宗教」が目指す現状維持とはかけ離れたものとして、生物の本質を描き出すのである。つまるところ、「静的宗教」とは、生命の維持に努めているのであるが、その維持というのは、その形のままの維持のことである。従って、「静的宗教」による「維持」は、生物の本質に適わない仕方でしか為されないのである。そのため、そのように「静的宗教」が支配する社会においては、進化を実現することは出来ない。では、我々はどうするべきなのか、このまま滅ぶことを望まれているのだろうか。むろん、そのようなことはなく、ベルクソンは「動的宗教」、つまり具体的には「キリスト教」によって、さらなる飛躍を実現できると語っている。

3-2　生命の飛躍

前節で扱ったように、「キリスト教」神秘主義は、維持どころか、他の神秘主義が至ることのできないような場所への、更なる飛躍を目指す。具体的には、「静的宗教」が一つの隔離された「社会」とその構成員を対象とするのに対し、「キリスト教」神秘主義は、「全人類」を対象として、広がっていこうとするのである。そしてそれは、「知性」によってのみ為されるのではなく、「漠として消えかかりつつも、なお残っている」（二源泉、

258頁)、「直観の縁暈」(同上)によって為されるとベルクソンは語る。この「直観の縁暈」について、再び平賀の論を参照したい。

> 『二源泉』でこの概念は、知性を包囲する状態の直観を意味するものとなっている。要するに、神秘家はただたんに直観から無媒介的にエラン・ヴィタルの運動を捉えるのではなく、知性から出発して、知性を包み込む直観の「縁」を通じてエラン・ヴィタルの把握に至るという過程が描かれているのである。(アンリ・ベルクソンの神秘主義、174頁)

「エラン・ヴィタル」、つまり「生命の飛躍」とは、生物の進化の本質であり、人間を人間として産み出した運動そのもののことである[8)]。つまり、そこに至るということは、人間をさらなる飛躍に導くこと、進化をもたらすことである。また、平賀はさらに、以下のように「静的宗教」と「動的宗教」を区別する。

> ベルクソンは、「このように出現する動的宗教は、創話機能から生まれた静的宗教と対立する」と明言している。というのも静的宗教の基礎である<創話機能>があくまでも知性を直観が取り巻く状態、つまり知性と本能との隣接状態から生まれるのに対して、動的宗教は「知性を囲む直観の縁」が「充分に広がり」、知性を「完全に」覆うことを意味する。(同上)

ベルクソンの記述からすると、一見「静的宗教」と「動的宗教」はどちらも、「知性」ではなく「本能」によって現れると言われているように見えるが、「動的宗教」においてはまず「知性」があって、そこから出発した先に至るものとして「本能」があるのである。そのような過程を辿って得られる「直観」にこそ、人間を新たな「生命の飛躍」に、進化に導く権利があるとベルクソンは考える。

またベルクソンは、「こうした努力をなし得る、またそれをなすにふさわしい魂は、現在自分の触れている原理があらゆる事物の先験的原因であ

るのか、それとも単にその地上的委任でしかないのか、などということを考えさえしないだろう」（二源泉、259頁）と述べ、特別な魂こそがそのような「直観」を行使し得ることを示している。ベルクソンはさらに、この「それをなすにふさわしい魂」について、以下のように述べる。

> こうした魂にとっては、自分よりも無限に強大でありうる存在に、自分の人格を吸収されてしまうことなしに、ちょうど鉄がそれを灼熱する火に浸透されるのと同じように浸透されている、と感ずるだけで充分だろう。その後は、生命に対するこの魂の執着は、歓喜の中の歓喜、ただ愛だけであるものへの愛、ともいうべきこの原理からそれを切り離すことは不可能であるほどのものであろう。そのうえ、こうした魂の持ち主は社会に一身をささげるだろう、だが、この場合の社会とは、全人類の原理であるものへの愛において愛せられた全人類であろう。（同上）

つまり特別な魂は、全人類の「原理」にまで、飛躍的に到達し得る存在なのである。そして「原理」、もしくは「ただ愛だけであるもの」とは、まさに「キリスト教の神」のことであろう。それは、ベルクソンが語る「キリスト教の神」が、「全人類を愛していた神」（二源泉、293頁）だからであり、その愛のもとでは全人類が平等なものとなる。そしてその神のもとに到達した魂、神との神秘的合一を果たした魂にとって、「社会」とはまさに神の愛を受けるべき全人類そのものである。そのような社会はもはや、既存の社会ではなく、完全に開かれている。つまり特別な魂は、飛躍によって原理たる神に到達することで、各々閉じられている社会を、神との合一によって獲得した、神と同じ「愛」において、全人類に「開く」のである。

しかし、上記のような飛躍を成し得るのは、まさに「神秘家」である[9]。しかしそうすると、神秘家ではない人間にできることは、神秘家を待つのみである、ということになるだろうか。否、そうではない。ベルクソンは、「ただ目を覚ます機会を待っているだけの眠れる神秘家が我々の心のなか

にいる」（二源泉、122頁）と語り、それ故に神秘家の言葉が我々に響くと語る。

またベルクソンは真の神秘家について、「自分に侵入してくる波濤に対しては簡単に心を開く」（二源泉、121頁）と語り、その理由を、「彼らは自分の中に自分自身以上に良い何者かを感じているから」（同上）であると述べている。未だ神秘家ではない人々と、既に神秘家である人々の違いはそこにあるのだろう。つまり、自分の中に自分よりも良い何者かの存在を直観し、その内なる声に魂を開くことができるかどうか、ということが、神秘家とそうではない人々を分かつのである。もちろん、内なる神秘家が目覚めるか否か、ということには、個人の努力では動かし得ない要素がかかわっているかもしれない。しかし、自身の中に神を見ようとすること、また、「他の人々が自分の魂を、彼によって、彼のために、人類愛に開くようにする愛」（二源泉、121頁）を伝えようとする神秘家の声を聞こうとすることは、神秘家へと近づく道となるはずである。そしてそうしたことのわかりやすい姿は、今日でも修道院や僧院で行われている、「修業」や「行」と呼ばれるものであろう。

またベルクソンは、「全体でひとつの精神的社会を形成する少数の特異な天賦の人々に、すでに弱まっていたにせよ、神秘的飛躍を伝えることだった」（二源泉、288-289頁）と語り、そのようにして、神秘家から神秘的飛躍を伝えられた各社会から新たな神秘家が現れ、彼らを中心とした新たな社会を形成することで、神秘的飛躍は維持されてきた、と語る。つまり「神秘主義」の目的地である「開いた社会 societe ouverte」[10)]、すなわちベルクソンが言うところの、愛によって開かれ、全人が全人を愛するような場へと向かう我々の歩みは、我々が知らぬ間にも続いている。そしてその途上に、「機械学」、「機械技術」があったのである。

ベルクソンは、食物を他者と奪い合わなければならないという自然の法則があるために、人間は普通、「家族や祖国を愛するのと同じように、自然に人類を愛する」（二源泉、286頁）ということは、出来ないと語る。だから、神秘家が愛を全人類に伝えることは困難を極めてきたのであるが、

「機械技術」は方向性さえ誤らなければ、農業の発展を助け、全人類を飢えから救うことが出来る。それは「開いた社会」の実現の道において、決定的な進歩であったはずである。問題は、当の機械技術が神秘主義に刃を向け、全人類の救済よりも若干の人々のための贅沢を推し進めてきた点にある。だから我々がすべきことは、内なる神に、そしてそれを既に直観している神秘家の教えに今一度立ち戻ること、そしてそれによって機械技術の目的を、全人類の飢えの救済に方向転換させることである。それが出来て初めて、機械技術は真に人類に役立つものとして、人類を押しつぶすことなく、人類と共に世界とかかわるものとして、歩み出すことができるのである。

そのようにベルクソンは、進歩に苦しむ人類に対し、進歩の帰結の最たるものである「科学」、「機械技術」との融和の方向を示した。そしてその融和は、それらとはまるで正反対にあるような、「神秘主義」を媒介にして進んでいく。しかし、この「媒介」というのは、あくまでも機械技術が人類にもたらした身心の「空隙」という問題を中心に据えたとき、我々に対して現れて来る「神秘主義」の姿である。それを、もし仮に、「神秘主義」を問題の中心に据えたなら、むしろ機械技術が、神秘主義を人類に行き渡らせるための「媒介」として働くだろう。つまり、人類の最も理想的な状態、誰もが神と繋がり、それ故に世界が完全に開かれた状態へと至る通過点として、物質的満足をもたらすものが必要であり、それこそが機械技術なのである。

したがってベルクソンは、科学と機械技術を最終的には歓迎する立場を取る。ただし、それらが人類に危機をもたらしていることもまた確かであり、その危機から脱して、さらなる進化の方へと向かうのか、はたまた滅びの道を辿るのか、それは当の人類の手に委ねられた一大事なのである。ベルクソンが、『二源泉』において、機械技術という問題を取り上げる目的は、まさにその危機の「自覚」を促し、人類に選択を迫るということにあると考えられる。すなわち、神秘主義への進化的回帰という選択を、である。

結語

本稿では、ベルクソンが描き出す「科学」と「機械技術」の特性と問題、そしてその問題を人類が乗り越えるために要請される「神秘主義」への回帰を、ベルクソンが如何なる経路によって描き出したのか、そして、「神秘主義」への回帰の先に如何なる未来を望むのか、という二つの問いを軸に展開した。本章では、改めてその問いに回帰し、それに答える形で結論を提出したいと思う。

まずベルクソンは、「技術」について、人間に固有な営みであると定義している。「技術」は「道具」と言い換えることが出来るが、それは、人間固有の「知性」が製作し、身体の器官として使用するものである。しかし、何故知性がそのような「道具」を作ることが出来るのかというと、それは「知性」の、有機体を無機体として扱う、という性質故であった。具体的に言えば知性は、時間に没入して常に移ろいゆく生物の、ある特定の「瞬間」を切り取ることで、生物の内的時間（持続）から生物を切り離すのである。そのような性質は、知性が、生命を生命として扱うことが出来ないということを示している。

そして、「科学」というのは、まさに知性の申し子であるのだが、古代の科学が「全体」において重要である「瞬間」を取り出した[11)]のに対し、「近代科学」は、無作為に任意の瞬間を取り出し、そこから全体を再構成しようとする。とはいえ、時というのは本質的に留まることなく、それこそ無作為に動き続けているので、任意の瞬間を分析することで全体を再構成するということは、実際不可能である。しかし、差し当たり科学は、そうしたことが可能であるという前提のもと発展を重ねてきた。そして、その結果生まれたのが「機械技術」である。

この「機械技術」は、順当に育ってきたというより、石油や石炭といった「潜在エネルギー」の発見によって突然現れた。もちろん機械技術も人間身体として働くのであるが、前代未聞の強大な器官であったので、本来

人間身体を制御して発展を促す「魂」が、役割を果たせなくなってしまった。そこでベルクソンは、その巨大な身体を制御できるほどの巨大な魂を求める。そしてそのためには、「道徳的潜在エネルギー」を蓄積すべきであると言い、それには「神秘主義」の力を借りねばならないと主張する。

その文脈で言われる「神秘主義」は、「キリスト教神秘主義」である。なぜならベルクソンにとっての「キリスト教」は、社会の構成員だけを対象とする「静的宗教」とは異なり、全人類を対象としていて、それ故に知性と本能の両方を持ち合わせるからである。つまり、感情や思惟を神と合一させるための「本能」と、一瞬の合一の後の恍惚に留まらず、その先を志向する「知性」と、その両方を、「キリスト教」は必要とするのである。それが、最終的に何を意味するかと言えば、更なる進化の可能性である。ベルクソンは人間を、現状最後の進化の結果と位置付けるが、人間は、その後の進化を為さず、「同じ円環の中で無際限な旋回運動」（二源泉、255頁）をしているという。それは、人間を死に至らしめないために、知性を抑制しようとする「創話機能」によって起こっていたことであるが、それを続けている場では、たとえ、ある特別な魂が神との合一を果たしても、その先には行くことは出来ない。なぜなら、更なる先を志向する「知性」が抑制されているからである。

しかし、ベルクソンが語る「キリスト教」なら、その先に行けるはずである。なぜなら、抑制なく無際限に働く知性を擁した「キリスト教」は、偶然も手伝った結果として、機械技術という強力な道具を手に入れたからだ。もちろん、そうした道具が逆に人類を「呻吟」させていることには、序論の段階で言及したが、それは結局のところ、ベルクソンに拠れば、「正しく使わなかった」ことによるのである。つまり、機械技術に必要なのは、抑制や排除よりも、正しい方向への転換であり、それには、先述したように身体を正しい方へ導く「魂」が正常に働いている必要があった。

では、どのようにして「魂」を巨大化させるのかと言えば、それは、全人類に愛を向ける「神」との合一によって全人類への愛を獲得する「神秘家」へと、人類が変化していくことである。つまり、知性による進化に対

応すべく、本能による進化が必要とされているのである。またベルクソンは、人類が「神秘家」となる方法を明確に記すことはしないが、各人の中に未だ目覚めぬ「神秘家」がいると語っている。

ただし神秘主義は、飢えの恐怖に憑かれている人には普及し得ないので、物質的欲求をまず満たさなければ、その「神秘家」は目覚めない。そして、その物質的欲求は、「機械技術」という強大な道具によって、満たされる可能性を持っている。そうであるなら、人々が神秘家へと変異し、全人類への愛を獲得していくことと、機械技術が全人類を対象としていくことは、同時に進んでいくことになるだろう。逆に言えば、「魂」が漸進的に拡大していくことで、機械技術も少しずつ正しい方へ向いてゆく、ということになる。

そしてその先にあるのは、進化であり、「開いた社会」の実現である。それはまさに、全人類が全人類への愛を持つような、そうした場への飛躍に他ならない。ベルクソンはそのような場へと人類が飛躍する足掛かりとして、機械技術という強大な道具が現れたことを示すのである。

しかし、そうしたことを具体的に実践していくのは、ベルクソンの問いに答えた後の問題であろう。そしてそれに答え得たなら、つまり、我々がもし、「生き続けようと欲している」ならば、また、「神々を作るための機械である宇宙の本質的機能が、反抗的な我々の地球の上においてでさえ、十分に遂行されるのに必要な努力を提供しようと欲している」のであるならば、我々人類は、神秘の領域への回帰を決意しなければならないのである。

注

1) ベルクソン（1859-1941）の周辺の時代では、無神論や唯物論が盛んであった。ベルクソンと時代を共にした無神論・唯物論の思想家には、フォイエルバッハ（1804-1872）、ショーペンハウアー（1788-1880）、マルクス（1818-1883）、ニーチェ（1844-1900）、ドストエフスキー（1821-1881）などの著名人が挙げられる。また、18世紀フランスでは既に、ラ・メトリ（1709-1751）やドルバック（1723-1789）ディドロ（1713-1784）らが、造物主としての神を否定している。（参照：岩

波哲学・思想事典、1569頁）

2）　ベルクソンは動物にも一定の知性を認めている。しかし、進化の最先端にいる人間の後方に位置する動物の知性は、人間と全く同じというわけにはいかず、「まだ人工的なものを作り出し、利用するには至らないとしても、自然に与えられた本能に変化をもたらすことによって、その準備をしている」。（創造的進化、178頁）

3）　ベルクソンが言う「内的持続」がそれであると考えられる。ベルクソンは、『意識に直接与えられているものについての試論（Essai sur les donnees immediates de la conscience）』（1889）において、「内的持続に関しては二つの概念化が可能である」（試論、98頁）と述べ、「一つはあらゆる夾雑物を排した純粋持続であり、もう一つはひそかに空間観念を介在させる持続である。全く純粋な内的持続とは、われわれの自我が現在の状態と以前の状態とを区別しないで、あるがままに生きているときに、我々の意識の諸状態がとる形式である。」（同上）と説明している。つまり「純粋持続」とは、完全にあるがままの我々の状態そのものであり、我々が内的に直観し、生きている時間のことであり、知性が取りこぼさざるを得ないのはこの「純粋持続」のことである。

4）　筆者が主に参照している平山高次訳の『道徳と宗教の二源泉』（岩波書店、1953年）において、原文の “Mystiqe” は「神秘学」と訳されているが、例えば平賀祐貴『アンリ・ベルクソンの神秘主義』（論創社、2022年）においては「神秘思想」と訳されている。また、『二源泉』では “Mysticisme” という語も登場し、これは平山、平賀両者とも「神秘主義」と訳しているが、“Mystiqe” と “Mysticisme” をベルクソンがどのように区別しているのかは不明である。ただし、ベルクソンは「神秘主義」について、普遍的に、異常状態や病的状態への関与を経て「人間意志と神の意志との一体化」（二源泉、280頁）であるとみなしているため、“Mystiqe” が「学」や「思想」に留まる中、“Mysticisme” は「実践」の意を孕んでいると言える。差し当たり本稿では、“Mysticisme” を神的なものとの合一をはかる実践的行為、“Mystiqe” をその “Mysticisme” への肯定と志向性を持つ思想や学問であると位置づけておく。

5）　原文の “Mécanique” を、注4)でも言及した平賀は「機械思想」と訳している。「機械思想」といわゆる「機械論」（『岩波哲学・思想事典』（1998）によれば、機械論の仏語は “Mécanisme”）を同一視するのであれば、ベルクソンが述べるところの “Mécanique” とは、以下の通りである。「自然界の諸現象を、霊魂や内的目的などの目的論的な概念を一切用いずに、作用因のみによって作動する機械とのアナロジーに基づいて解釈しようとする決定論的な、かつ還元主義的な思想」（岩波哲学・思想事典、303頁）。ただし、“Mécanique” には「力学」や「機械工学」という訳後もあてることが可能であるため、ベルクソンが具体的に “Mécanique” という語で何を想定していたのかは不明である。ただし、いずれにせよ「力学」も「機械工学」も「機械論」的な世界観を所持していることは確かであるため、いずれの訳語をあてても文脈としては通用する。

6）　二源泉、277～284頁。

7)　アンリ・ベルクソンの神秘主義、159頁。

8)「エラン・ヴィタル élan vital」は平山訳『二源泉』（岩波書店、1953年）において、「生命の飛躍」と訳されている。ベルクソンがその著『創造的進化』のなかで用いたところから有名になった用語であり、生物の進化が「物質的要素の外的、機械的結合によってではなく、唯一の単純不可分な内的衝動によって飛躍的に変化する」『哲学事典』（平凡社、1972年、168頁）ことを表している。同時に、生命が「エネルギーを蓄積しては、それがかぎりなく多様な仕事を果たすような柔軟で変形自在の通路にそれを放出しようとする努力のようにみえる」（同上）もの、それこそが「生命の飛躍」の働きである。したがって「生命の飛躍 élan vital」とは、生物の進化の実相そのものであり、その飛躍の結果として、全て今の生物がある。またベルクソンに拠れば、人間は、現状最後の飛躍が成功した結果であるが、さらなる飛躍については未だ迎えておらず、同じところをずっと「旋回」している。（二源泉、258頁）

9)　ベルクソンは、「それをなすにふさわしい魂」を直接「神秘家」のそれであると語ることはしていないが、「飛躍」を成し遂げた魂がその後に味わう「暗夜」について、「偉大な神秘家」によって語られたと記述しているため、その「魂」が「偉大な神秘家」のものであることが分かる。（参照：二源泉、282頁）

10)「開いた社会」の対極にあるものとして「閉じた社会」がある。この「閉じた社会」とは、外界に対して排他的に閉ざされている社会である。そこには現今「社会」と呼ばれているもの大体が当てはまり、最小では家族、最大では国家がその「閉じた」形態にある。それに対して「開いた社会」とは「人類全体に開放せられた社会」（ベルグソン、191頁）である。ベルクソンは、この「開いた社会」が、「愛」によって成り立つと説くが、それは家族愛や祖国愛といった、「閉じた社会」における愛とは全く質を異にする愛であり、いうなれば「神」への愛、すなわち全人類を愛する神を愛することによって得るような、神秘的な愛である。そして、その結果として成り立つ「開いた社会」とは、全人類が全人類を愛するような、そうした場であり、人類を完全に包みこんで広がる社会である。（参照：二源泉、277-294頁）

11)　科学における客観性が、あくまでもその「科学」という枠組みの中にある限り、「全体性における重要な瞬間」ということもまた、広義では任意と言わざると得ない。しかし、任意であれ「全体」を設定した上でそこから重要な点を取り出す、という態度には、無作為に点を取り出す近代科学に比べ、「全体」への志向性が強いことが示されている。

凡例

1．略記法

・『道徳と宗教の二源泉』＝二源泉

・『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』＝ベルクソンの哲学

2．引用を除く「」は筆者による強調部分を示している。
3．本文の総文字数は、注を含んで20077字である。
4．引用箇所は本文中に記載した。
5．注は本文編各ページの下部に記載した。

参考文献

Henri Bergson, Les deux sources de la morale et de la religion (Paris: Presses Universitaires de France, 2008).
ベルクソン『意識に直接与えられているものについての試論』（竹内信夫訳、白水社、初版、2010年）。
ベルクソン『創造的進化』（合田正人、松井久訳、筑摩書房、第５刷、2010年）。
ベルクソン『精神のエネルギー』（宇波彰訳、第三文明社、初版、1992年）。
ベルクソン『思想と動くもの』（河野与一訳、岩波書房、初版、1998年）。
ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』（平山高次訳、岩波書店、第31版、1953年）。
澤潟久敬『ベルクソンの科学論』（中央公論社、初版、1979年）。
市川浩『ベルクソン』（講談社、初版、1983年）。
平賀裕貴『アンリ・ベルクソンの神秘主義』（論創社、初版、2022年）。
檜垣立哉『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』（講談社、初版、2022年）。
廣松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、野家啓一、末木文美士編『岩波哲学・思想事典』（岩波書店、初版、1998年）。
下中弘編『哲学事典』（平凡社、23版、1971年）。